



絵と文・佐藤英行



58

麻生区  
文化協  
会会報

妙香山 常安寺 Ⅱ 河童寺 Ⅱ

鶴見川を眼下に見る上麻生の高台に位置し、境内からは三輪野が一望できます。この常安寺は「永正十二年（一五一五）七月、日鏡上人によって開かれた」と記されています。開基は領主小島佐渡守源左衛門高治がその館の裏鬼門の守りとして堂舎を創建したと伝えられています。天文十一年（一五四二）寺は火災で焼失しましたが、同十三年日了上人により再建されました。

また当寺は民話で知られている「河童寺」でもあります。

お経を習った「河童の平六」

その昔鶴見川に河童の家族が住んでいたそうなの。ある日の夕方お寺にやってきて、お経を教えてくださいといふのです。和尚さんは「河童のくせに、お経など覚えてどうするのだ」と聞くと、河童は涙を流しながら「今年日照りが続き川の水が少なくなつて、私たちの仲間が一匹また一匹と死んでいきます。その葬式の時にお経を上げたいのです」と言つたそうなの。和尚さんは感心してお経を教えました。御礼に河童の平六は証文を書き残していきました。その手印の証文が長く常安寺に保存されていたそうです。「かわさき民話集」より

三年前から磯野善秀住職と檀家の故小島一也氏をはじめ、役員の方々が集まり、構想を練り、筆者が下絵を描き石像が完成し、今年一月十五日にお披露目となりました。一度散歩がてら立ち寄ってみてはいかがでしょう。桜の木の下で、お経を上げている河童に会えます。

## 地域文化の発展に関係機関・団体の更なる連携を

麻生市民館長 猪瀬 敦

### 地域文化の創造と発展

麻生区は、新百合ヶ丘駅周辺を中心に昭和音楽大学や日本映画大学、また、川崎市アートセンターなどの文化施設が集積し、年間にわたって多くの文化活動が行われ、芸術文化のまちとして大きく発展してきました。その中で、麻生区文化協会は、長年にわたり、地域に根ざした文化活動を展開され、麻生区に於ける地域文化の創造と発展に大きく寄与してきました。これも菅原会長をはじめ、役員・会員の皆様のご尽力の賜物と思っています。

私も市民館で、皆様の活動の一端ではありますが、拝見させていただきます。



皆さんの文化に対する熱意には大変感銘を受けるとともに、そのエネルギーの大きさに驚いているところでございます。「夏休み親子教室」では、

次世代を担う子どもたちが様々な体験を通して、「生きる力」を育めるよう、多彩な講座が企画され、多くの子どもたちが楽しんで学んでいます。また、麻生区文化祭では、邦舞・洋舞をはじめ美術工芸の展示、麻生フィルの演奏会、また俳句大会などが行われています。さらに、あさお古風七草粥の会は、正月の麻生区の風物詩として親しまれるだけでなく、昔からの日本の伝統芸能を子どもたちに伝える良い機会ともなっています。

地域文化の発展は、長い時間の中で培われていくものと思います。現在に見られるこのような麻生区の文化の発展は、文化協会の皆様をはじめ区民の皆さんによる様々な活動の積み重ねであり、皆様方の地域の活動が麻生区の文化を創ってきたものと思っています。

### 地域人材の発掘と育成

さて、区内には各分野で豊富な知識や経験を持ったシニア層など、多くの市民が居住する一方、防災・防犯や環境保全、子育て、高齢者・障害者支援などの分野で地域活動の担い手が必要となつていきます。

そのため、現在、麻生区では地域人材の発掘に向けた啓発事業や人材情報の収集、また人材育成ニーズに基づいた育成事業を実施して、地域活動等に関心のある区民や人材育成講座を修了された地域人材を地域活動や市民活動へつなげていく仕組みづくりを進めています。

この事業では、特に地域の人たちを具体的な実践活動の場に導いていくための段階的できめ細かい誘導が大切であるとして、その誘導役となる地域人材コーディネーターの役割等について、今年度設置された麻生区地域人材育成連絡会議で検討しているところであります。

### 文化の芽を育てるために

時代がめまぐるしく変化する中、麻生区でも高齢化が進み、文化の担い手が少なくなつてきています。これからの私たちに課せられた課題

は、如何にして麻生区の文化を次世代へ守り育てていくかではないでしょうか。

私は、市民館での三年間を通して、文化協会の皆さんをはじめ、市民館のサークル連絡会、また、アルテリッカしんゆりや麻生音楽祭などで本場に多くのボランティアや団体の方が活動していることを知りました。そして麻生区の文化を継承していく人材はこの中にもたくさんいるのではないかと思います。

市民館や麻生区の文化関係機関はこのような人たちにもっと目を向け、地域人材の発掘・育成や活動発表の機会拡大などを通して、さらに連携を図っていくことが大切であると思っています。

近年、麻生区文化協会と麻生区美術家協会がコラボし、川崎市文化財団と合同して開催している「アルテリッカ新ゆり美術展」はその身近な例ではないでしょうか。

地域文化の発展と継承に取り組んで来られた麻生区文化協会の種は、あちこちで芽を出しています。今後も麻生区文化協会の皆様のお力添えをいただきながら、関係機関・団体との連携を深め、地域文化の発展に尽くしてまいりたいと考えています。

## 俳句への道

池内 英夫



会社勤めを定年退職後、趣味として無き身は、子どもの頃より好きであった釣りをまた始めることにしました。たまたま麻生区文化協会で「海釣教室」が開講され、渡りに船と早速これに参加しました。講座修了後、受講生の方たちと「麻生海釣同好会」を結成し現在に至っています。また同時にその頃、農協の家庭菜園の話もあり、こちらにも参加し釣竿を鍬に替えての畑仕事です。種まきから収穫まで違った楽しみが加わりました。

も撤退せざるを得なくなりました。屋外から屋内へ、これが私の「俳句への道」の始まりです。俳句は学生時代から面白半分友人たちと少しは楽しんだことはありますが、本格的に勉強したことはありません。ただ俳句に対する興味はそのころから、心底にあつたように思います。しかしサラリーマン時代は（企業戦士）として高度成長の一翼を担ってきたと自負していましたので、その時代「俳句」などという心のゆとりが無かったことは事実です。振り向けば仕事にどっぷり漬かってばかりの人生。潤いのある人生も必要と、第二の職場に移った機会に業界団体の主催する俳句講座に参加しました。これは大変勉強になりました。角川書店「俳句」の石本編集長、俳句結社「狩」の同人・杉先生に五・七・五の世界を学ぶ機会に恵まれました。

その頃、地域で開催される

「俳句入門」（楽しい句会）に参加することになりました。このカルチャーは、ヨネッティ王禪寺に於いて、延べ二十回にも及ぶものでした。講師は地域結社「さざなみ」主宰の笠原古畦先生。先生のご指導の下、俳句の「いろは」から教わりました。俳句を本格的にはじめてからも二十数年にもなるうかと思えます。その間、日常的な世界はもとより非日常的な世界に於いても感性の大切さ、物の見方などずいぶん勉強しました。

少しはお役に立つかと思ひ、最近私は私が講師となり俳句教室をいくつか開講し、現在その受講生たちを中心にした句会も大きく育ってきました。平成十六年には第一句集『七國峠』を角川書店より上梓することが出来ました。

七國を見渡す峠草紅葉

題名の『七國峠』は私の初期の一句から採ったものです。

『俳句の第二芸術論』

評論家桑原武夫氏は昭和四十六年「俳句は第二義的芸術である」と、伝統的詩形である俳句の持つ近代性を批判したことは有名であります。が、日本に帰化した前・米コロンビ

ア大教授のドナルド・キーン博士はこれに対し、「他の国は一流芸術はあっても第二・第三の芸術は無い。素人でも参加できる第二芸術があるのは日本だけであり、俳句こそ一般大衆に親しまれる芸術である」と述べられています。私もこれに賛成。俳句は「庶民の芸術」として、大いに愛され、楽しんでもらいたいものだと思っています。

終わりに、今や俳句は高齢化の波に直面し、俳句人口の減少にさらされていますが、俳句をこよなく愛し日夜精励に努められている人々がこの世界を支えて居られ、まだまだ前途洋々たるものがあります。俳句を生き甲斐としている方もたくさん居り、頼もしい限りです。

私の俳句への道も二十数年の月日が経ち、いろいろと勉強を重ねてきたつもりではありますが、未だその途上にあります。これからも大いに研鑽を積んでいきたいと思つて居ります。

自選五句

魚の目にまだ海のあり花の冷え  
初蝶の飛び立つ風を選びをり  
桐の花女人の高野にしぶく雨  
秋茄子やほどよき距離の嫁姑  
残照にわれも花野の彩となる

# 茶の湯を通して

地域や文化協会との豊かなかわり

## 加宮 節子さん

橋本 周

加宮節子さんは、初代会長から現会長の五代にわたり、役員・専門委員として、関わりが深く、ご尽力いただいております。

凛として、美しく活動される加宮さんにお話をうかがいました。

### 幼少時代

節子さんの父親は、大学卒業後経済人であったが、所帯を持つにあたり、東京に近い川崎は丸子に居を構えた。数年後、節子さんは誕生した。戦争が激しくなると父親に召集令状が届く。残された母親と節子さんは、父親の実家である静岡県富士へと移り住み、父親の帰りを待った。実家は先祖代々村長を継ぐ旧家で、地域の人たちのために私財を投じ、貢献してきた家系だった。幼少期をそうした環境の下で育てられたことは、節子さんの生き方に大きな影響を与えることになる。

### 自分みがぎと学生時代

育つ環境に恵まれ、両親はもとより祖父母や周りから、女の人の生き方や、教養のみがき方など、多大な影響を受ける。特に、父親からは「道」のつく習い事を勧められ、作法や書道、茶道、華道を極めることとなる。やがて、東京女子大学へと進み数学を専攻する。当時、女の人が数学を

専攻することは稀な時代であった。下宿は吉祥寺。この下宿は近隣に通う女子大生に貸すことを条件にしていた。下宿の主人は女の子には、お茶・お花・琴など身につく習い事をして欲しいと願っていた。そんな出会いから、学業の傍ら茶道を志し、精進してきた。

### 茶道は合理的でサイエンス

茶道は、精進し深めれば深めるほど奥深く合理的かつ科学的で、理屈にならなっている。更に、美的であることに気づき、魅力にとりつかれた。節子さんの極めようとする気持ちからライフワークとなる。

「茶道は、一服のお茶で成り立っているのではなく、炭をおこし一汁三菜を造り、日常茶飯事の食事と喫茶を四時間の経過の中で終える文化といわれる」と説明される。懐石では酒は後で出るが、会席は酒をはじめから出る。茶道の究極は、茶事を経験することの精神文化とみなされるようになっていく。それは、亭主の心を込めたおもてなしが極めであるとも言われる。茶事の亭主になるには、一期一会で禅からの発祥とされる斬新な気配り、一つの事を成す

には、みなで進める大事さがあり、今の自分の生き様や活動にも活かされていると節子さんは話す。

### 縁ありて麻生の地へ

卒業し就職は決まったが、職業婦人になる事を両親は好まず、郷里に戻って、近所の子供たちにお茶や勉強を折々に無償で教えていた。

ご縁があつて結婚し、東京で生活を始める。子育ての傍ら茶道は続けていた。そんな折、友人の紹介で麻生区細山(現・向原)に居を構えることになる。大規模な宅地造成が進む中、初期の転入者であり、いわゆる新住民であった。従来からの居住者は山林などの所有者が殆どであった。節子さんは、ゆりの花咲く自然に恵まれた環境は気に入ったが、見知らぬ土地、見知らぬ人で非常に心配や不安があった。そこで、「芸は身を助ける」ではないが、節子さんの力が大いに発揮されていた。

### 茶道がとりもつつながり

ご主人は、仕事第一の生活だったが、節子さんは、日ごろから地域とのつながりや人との関わりを大事に



したいと考えていた。地域の人たちの関わりを始める手段として、自身にできる茶道を活かそうと町内会の婦人部の人たちとお茶会を始めた。回を重ねるに連れ、お茶に興味を持たれ、相互関係が深まっていったとのこと。時には、地域の娘さんの縁談が決まり、即席で茶道を学びたいと通われもした。

茶道の魅力に惹かれた方々は、更に極めたいと。町会では、略式のお盆立て稽古だったので、茶室のある自宅で教え始める。その頃の人も含め「松風会」として皆さんとの関係が続いている。

「たいしたことはできませんが、自分にできる茶道を活かした縁で、人との暖かな付き合いや地域とのつながりが築けたようです」と、茶人らしい趣と気品ある節子さんは当時を述懐する。

### 古風七草粥との出会いから

細山郷土資料館は昭和五五年に開館。その後、昭和六一年からアカデミー部が「古風七草粥の会」を始めていた。ご主人は知人に誘われ、すでに七草粥に参加していたので、節子さんに参加を勧めた。一服のお茶

で皆さんに喜んでいただけたらとお手伝いを始める。

茶道具を提供しながら、心を込めたお茶会を大事にしてきた。「そんな些細な気持が受け入れられてか、地域の皆さんとのつながりもうまくできたように思う」とちよっと誇らしげに語られた。

地域には句碑が多く、俳句が盛んであった。また「若者が邪道に走らないよう」先人が寺を中心地域の教育力を培ってきた風土、人々の氣質や温かな人柄に触れ、豊かな自然環境に恵まれたこの地を「第二の故郷」との思いを強くしたという。

### 文化協会への一歩

藤田親昌先生や箕輪敏行先生との出会いがあつて、役員を要請され会計でよければと関わりが始まる。地域文化に熱心であつた箕輪先生や杉本長治先生から多くを学び影響を受けた。地域の俳句団体との関わり、ふるさと創生や小学生対象の麻生川の学びなど。また、区民会議や総文連にも関わることで、外部団体の活動や情報から刺激を受け学ぶことも多かつた。

### 歴代の会長との活動

初代の藤田先生は、現在の文化協会の礎を築かれ、人を上手に動かし、馬場あき子さんなど麻生区在住の文化人を取り込んでいく人脈の豊かさがあった。

箕輪先生は、地元で生まれ育つた温かな人柄で、折りに触れ草花を市民館や会員に届けるなど自然を愛し、教育・文化に情熱を注がれた。特に、天体観望に尽力され、私財を惜しみなく投じ、多彩な活動をすすめる先生に感動した。

杉本会長のように懇願されて副会



長になる。杉本先生は非常に筆まめで、郷土史や記念誌など歴史・文化の記録を多く残した。活動に熱心で課題解決は迅速を旨とした。特に子供たちに日本の美である伝統文化のお茶、お花、踊りを伝えるため「お楽しみ玉手箱」を開いた。そこで、

節子さんは「茶の湯の心を伝え、お茶を通して人を思いやる心や作法を伝えたい」と活躍。恒例の夏休み親子教室に受け継がれている。

「顧みますと、麻生区創生期から禅寺丸柿や麻生川の桜まつりに役所も力を入れてくださり、そこでの野点を松宮さんはじめ皆さんと楽しくつとめました」と多くの会長とともに活動された思い出を懐かしむように話された。

### 魅力ある文化活動に期待

「今年の俳句大会に子供の句を取り入れたのは、斬新で良かったです。文化は一朝一夕にできるものではなく、代々の方々の努力が積み上げられて育っていくものですから、地域を巻き込んだ活動は、魅力が生まれ、活性化につながっていくのではないのでしょうか」と示唆の富む言葉で話を結ばれた。

平成二十六年(十一月九日)  
第二十六回 麻生区文化協会俳句大会

実行委員長 本玉 秀夫

川崎市長賞

木に習ふ木地師の技や秋澄める

宮前区 篠田 さく江

川崎市議会議長賞

山百合を背負子に挿して畑下る

府中市 伊原 正江

川崎市教育委員会賞

新涼の風がつれ出す車椅子

多摩区 小野 島子

麻生区長賞

翁独り水輪広げて棚田植う

麻生区 本玉 秀夫

麻生市民館長賞

雪溪や生れしばかりの水の音

麻生区 大谷 袈裟次

川崎市総合文化団体連絡会理事長賞

行きずりの人と軒借る夕立かな

麻生区 佐野 通夫

川崎市観光協会会長賞

風鈴市風を拾って音色撒く

麻生区 松野 茂

麻生観光協会会長賞

少年の輪唱清かケレン積む

北杜市 細野 政治

麻生区文化協会会長賞

木苺を摘みて童話の中に入る

麻生区 横川 博行

第一回麻生区小学五年生俳句大会

優秀賞

あそんだよ日焼けが証拠の夏休み 齋藤華子 片平小

花火散り静けさもどるまちの中 山口莉里 麻生小

発表会順番待てずに歌うせみ 宇賀有美 桐光学園小

蝉が鳴く自然豊かな奥大井 平野 悠 片平小

ゆかた着てちよつびりおめかし花火の日

岸谷歩美 麻生小

かき氷吉の色までまわって 富樫若菜 千代ヶ丘小

蝉の声夏が来たよとしらせてる 梶うらら 岡上小

蝉の声合唱団のハーモニ 赤池愛佳 岡上小

夏休み高校きゆうじあせなみだ 星野心平 片平小

えんがわでみんなど食べたかき氷

川口穂三菜 麻生小

平成二十六年度俳句講座開催

八月二十六日

講師 山崎祐子(りいの編集同人)

演題 「暦の構造と季節感」

九月二日

講師 復本 一郎

(実験的超結社集団「鬼」の会代表)

演題 「子規は芭蕉から何を学んだか」

九月九日

講師 馬場身江子(さざなみ同人)

演題 「地生えの俳誌さざなみと

その周辺」

文化講演会(十一月二十二日) 講師 梶亨  
「童謡・唱歌のふるさとを訪ねて、ここを歌おう」

文化サロン部 森 妙子

今回の文化講演会は、麻生区文化協会三十周年記念として、今後の発展を期待して幅広い年齢層の方々に参加していただけるような会を企画した。

そこで、文化協会・専門委員の

梶亨氏に、タイトルの内容でお願いしたところ、「あちらこちらで

童謡を歌う会が開催されていていま

ですが、今までは違った取り組み

でできそうですね」との嬉しいお

返事。講演を聞きながら童謡も聞

くことができたなら一層味わい深

いものになると考え、大人だけで

なく子どもにも参加してもらう

ことを企画した。近隣の小学校へ

依頼をしたところ「子どもたちに

とって、発表の良い機会になるで

しょう」と快諾して下さった。さらに、映像で会場を秋の雰囲気

満たすことができたなら講師に

相談したところ、文化サロンの

協力も得られるのならOKとの

こと。

当日は、素晴らしい秋色の風景

を見ながら、講師の話聞き童謡

の故郷を訪ねたり、歌の誕生秘話

を知ったりしながら童謡の世界

を楽しんでいただくことができ

た。



いつもは年齢層が高い方々が多いが、今回は参加した子どもの保護者や友達参加もあり、若い方々に文化協会を知っていただ

く良い機会になったと思う。

参加者からの感想の一部

★身近な場所の秋の映像を取り入れながら

の講演は素晴らしく、感動しました。解説

にそっての歌の進め方も大変良く、心が和

みました。

★講演を聞きながら、プロの独唱に感動し、

小学生の歌声は「さわやか」で、大人のコー

ラスもあり、バランスよく、久しぶりに心

洗われる時間がもてました。

一〇〇〇食突破の大盛況!

# 第十二回 あさお古風七草粥の会

岩田 輝夫

今年もお天気に恵まれた一月七日に、文化協会主催の「あさお古風七草粥の会」が区役所広場で盛大に行われた。平成十六年に第一回目が行われたときには配食数は三百食であったという。それ以前は細山郷土資料館で文化協会アカデミー部の新年懇親会を「七草粥を食べる会」として行われていた。こういう素晴らしい会は広く区民の会にしたらどうだろうか、ということから区政推進事業の一つとして、文化協会の主催で始められ



たものである。

区役所の中庭にある七草畑（七草園）もアカデミー部会の皆さんが中心となり平成十九年七月から約半年かけて造り上げたものである。そして、今年も寒い雨の中で地元の障害者施設の皆さんが中心になり、畑の手入れをはじめ、会場設営の作業を担っていただけたので心から感謝したい。

二月五日には古沢周辺で川の中や斜面で足を取られながら会員やボランティアの皆さんが七草摘み



を行った。前日の六日には、この行事の一番の立役者である調理場担当の皆さんが七草粥の下拵えや仕込みを、また、七日の当日は、調理係、配食係をはじめ会場係、受付係、お茶係、食器の片づけ係、



1,000人を超える方が列をつくった

粥の運搬係、餅焼き係、掲示係など多くの方々のおかげで、活動が何とも素晴らしいであった。そして、七草粥を味わいながら恒例の出し物である「童謡を歌う会」「お囃子の会」「書家の揮毫」「お正月遊び」を楽しみにして来られる方もたくさんいらっしゃる。

今年も「東日本大震災義援金」の呼びかけには多くの方々から六〇一七五円の募金をいただいた。五四三二二円ほどを読売光と愛の事業団に送金し五千円を七草畑の維持費に回した。今年も千食を超えて、嬉しい悲鳴ではあったが、これからも文化協会全員の力で頑張っていきたい。

# 会員の活躍

## 「洗心 心澄まして書に向かう」

笠原秋水・道汀 共著

凛として咲く寒椿紅なれば

我が金婚も紅で飾らん

夫婦二人で金婚の日を迎えられた喜びに、書の道五十余年の一区切りを意識した矢先、(社)クリオアート(旧世界文藝社)から製本の誘いがあった。渡りに舟、金婚を理由に一人で二人でに変更していただいた。結果、書評は秋水だけ、表紙も秋水一人だけ、他人まかせの本だからまあしょうがないと呑みこんで奥付に「自選集」「金婚の年に」「道汀」の三つを追加していただいた。

▼心の本として、一生そばに置き、その時の心を洗い、なぐさめ、ふるい立たせたく思っています。

(全難聴の書のお仲間より)

▼剛さと優しさ、激烈さと繊細さが好対照を見せていて、さらにそれが響き合って夫婦の参加を奏でているようで、何とも素敵なお本。

▼孫の誕生を喜んで作られた袖の木の詩や、亡き義父母を偲ぶ詩などから家族の絆や家族の歴史がしのばれ、

深い感銘を受けました。そして、一つの書が、書き手と受けてのコミュニケーションを図るよすがになることを改めて感じました。

(元国語研究会会長)



「洗心」より秋水の見開き作品2点  
右：けさもよい日の星一つ(種田山頭火句)  
左：メロスは激怒した(太宰治)

この本を使つての研究会をご案内したため本が完売となり、研修会参加者は70名で満員。創作落語をまじえた秋水の講演「寄鍋小話」ミニミニパーティ。心に灯をともして帰宅された凌雲社の仲間達。

夫婦の主張「こころを言葉に言葉を書き」「読めてわかる書」は心の共有・交流を目指している。麻生図書館へ一部寄贈した。半年後、「楽天」などで電子書籍としてお目見えする予定だ。

(道汀記)

## 文化協会の重鎮 小島一也氏・杉本長治氏を偲ぶ

◆小島一也氏が平成二十六年十二月五日突然ご逝去されました

柿の実幼稚園の設立、幼稚園協会での活躍など幼児教育にかけられた情熱は麻生区の多くの子どもたちに生かされています。また地元市議会議員、市議会議長も務められ、市政にも多くの功績を残されました。生まれ育った柿生をこよなく愛され、その歴史を一筆一筆書き綴られ、まさに大切な生き証人として昔を今に伝えてくださった文化人として文化協会では大切な方でした。

◆杉本長治氏が平成二十七年一月二十六日突然ご逝去されました

一月七日の七草粥の会にご夫妻でおいで下さり、召し上がっていただけただけに一同感謝しております。昨年の文化協会三十周年式典では、感謝状を贈呈でき、私たちのささやかな心をお伝えできたと思っております。川崎市総文連の理事長もお務め下さり川崎市市の文化の振興に尽力され、多くの示唆を与えてくださいました。

※ともに昭和二年生まれ。お二人のやさしい笑顔と語り口、心のコもった文章と筆跡にいつもお人柄を感じさせられました。

お二人のご冥福をお祈りし、感謝の心をお伝えしたいと思います。

文化協会会長 菅原敬子

## 編集後記

▼五五号でご紹介した小島一也さん、五六号・記念誌でご執筆いただいた杉本長治さん、麻生の来し方を語る数少ない方が相次いで逝去され、もつと聞いておけばと残念な思いがつのります。▼昨年「舟を編む」という映画を見ました。「ひと」は辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かび上がる小さな光を集める「辞書」を編むという気の遠くなるような作業に比べ、本誌の編集は、毎号各位のご協力あればこそと、広報部員一同深く感謝しております。

(佐藤勝昭記)

畔田二郎、岩田輝夫、小田島紀美、小田島寛、佐藤勝昭、関森田鶴子、橋本周、横須賀朝子

### 麻生区文化協会会報

からむし 第五十八号

平成二十七年三月三十一日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会広報部

川崎市麻生区万福寺一五二

麻生文化センター内

☎ 〇四四一九五一―三〇〇

印刷 (株) エリアブレイン